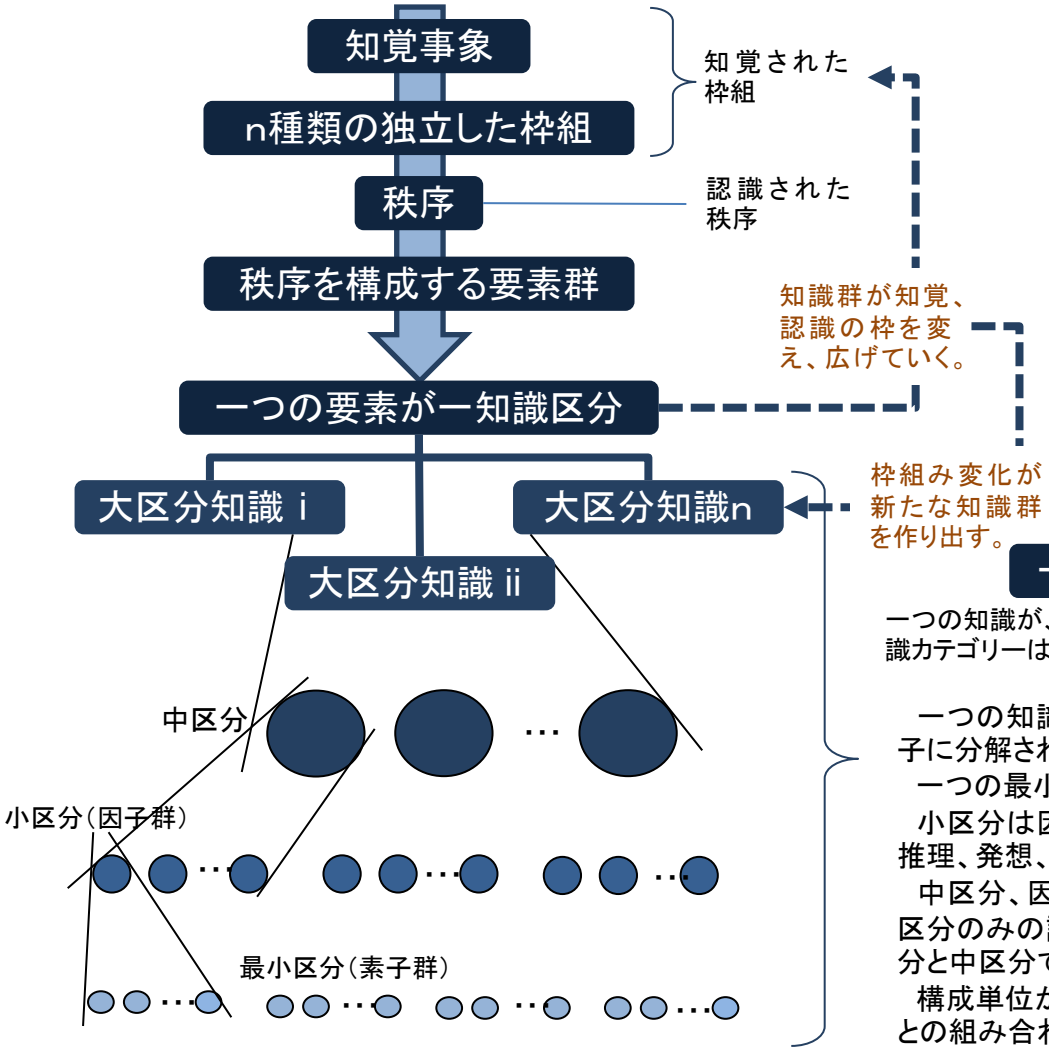
個人が知識体系を構築する知力をつける

知識体系は、自らが持つ知識群を基に自らが整え体系づけていく。



知識を如何にしてとらえているかが問題である。

元々、自然の中に知識は埋もれていた。自然現象、自然のサイクル、自然が作り出す秩序と混乱を観察し続け、ある種の規則を見いだし論理化されるようになった。長い年月をかけて現在に至っている。

科学の枠が広がり、一つ一つが掘り下げられ、細分化して科学体系が出来上がっている。科学を学び、科学カテゴリーを知り、カテゴリーの中で学んでいる。

現実は既存カテゴリーでは満足しない。

新しい知覚がある。新しい現象が起こり、新しい知識が産まれ、ぶつかりあっている。そこで、仕事をし、体験する事柄自体が真新しい。自らが経験を知識化し、体系化しなければならない。

一つの知識区分に複数の知識体系が存在する。

一つの知識が、別の領域、異なる現象に関わるとき、新たな知識カテゴリーになる。知識カテゴリーは進化する社会に決定される。過去のカテゴリーに縛られる必要はない。

一つの知識はいくつかの中区分知識に分類される。中区分知識は、因子に分解され、さらに素子群に分解される。

一つの最小区分の知識は、定義または公理にあたる。

小区分は因子になる知識が、知識を構成する5つの要素「記憶、論理、推理、発想、表現」で成り立つ。知識が形成される最小単位になる。

中区分、因子群を組み合わせて、単元となる意味を持つようになる。中区分のみの論理で、一つの専門的知識を表す。技術化されるのは、小区分と中区分で行われている場合が多く、特異化要素に成りえる。

構成単位が小さくなるほど、組み合わせが多くなり、他の知識カテゴリーとの組み合わせができる確率が高くなる。

最小単位になる定義（公理）を出来るだけ多く発見するように心がける。

copyright SeedWin